

過去の震災の教訓レポート：阪神淡路大震災後の乏しい記憶から

柳田泰義（神戸大学）

いつものように目覚まし時計は5時30分を告げた。まだ夜明け前の真っ暗な中、トイレに立った。便座に座って用を足していた最中であつた。大きな左右のゆれが来た。南北の方向であつた。思わず便器内の液体がこぼれないかと心配し、やや腰を上げたが、あまりの大きな振幅で便座から落とされそうな気がして、左右の壁を両手で支え、残りの右足で扉を押し出して閉じ込めを防いだ。次にやってきたのは上下左右あらゆる方向に、しかも非常に激しく、ちょうど孫悟空がお釈迦様の手のひらでもてあそばれた様に揺さぶられた。家中のぶら下げているもの、置いているものすべてが音を立てていた。時間は非常に長く感じた。揺れが治まった。近所は物音一つしない。先ほどの騒音はどこへ行ったのかと思つた。すぐに家人の様子を大きな声で聞き、無事を確認。階下に降りるもあらゆるものが落ちており、食器棚からは食器が崩れ落ちそうになっていた。家人に割れ物があるかもしれないから裸足では歩くなと告げる。ピアノが移動し壁に突っ込んでいたのは驚いた。情報を得ようとするが電気が通じない。やけに静か。

建築後ちょうど1年の我が家の損傷はないようだ。家人がみな着替えて階下に降りてきた。余震があるかもしれないからと判断し外へ出る。近所の人も出ていた。電気が来ないのでラジオがつかない。もちろんテレビはあきらめた。車庫のシャッターを開けようとするが車が移動してシャッターが開かない。息子と力を合わせてやっとシャッターをこじ開け、自動車のラジオから情報を得た。息子が「阪神高速が倒れているらしい」。そんな馬鹿な、と信じたくない気持ちが強かつた。現実には本当だった。どうも神戸が震源のようで、大阪あたりは無事の様子。すぐに近所の公衆電話へ向かつた。まだ誰も来ていなかった。すぐに大阪の実家へ、仲人親さんへ、家内の実家（奈良）へ、家人の無事と家の無事を告げて、受話器を置き後ろを振り返ると長蛇の列であつた。

神戸大学体育の現状

神戸大共通教育のふたつの体育館と武道場にはあわせて三千人の避難者が暮らしていた。体育館最奥の倉庫に実技入学試験の用具を入れていたので、被災者の代表者と交渉し、体育用具一切を臨時の倉庫に移転する作業の日時、方法を相談し、実行した。体育館に入ると倉庫までの道筋はすでに荷物は移動してもらっていた。じろじろ見るのも悪いと思いきや、見えるところでは、体を横にするのもままならない超過密状態。搬出作業中も余震があり、体育館の軋む音と悲鳴が忘れられない。人々の顔色は悪く、不安感のかたまり。それになによりも寒い。屋外と変わらない。老夫婦の顔が忘れられない。涙が出そうだった。

新学期が始まるも体育館、武道場、教員室など、あらゆる部屋は被災者関係の部屋で使えなかつた。グラウンドは仮設の調理場、風呂場、ボイラーなどが建っていた。残ったスペースで授業はできたが、被災者の前ではとてもできなかつた。テニスコートも亀裂が入り、一部は陥没していた。体育の授業は歩いて20分ほどの高台にある他のグラウンドで行った。用具はすべてをそろえなかつたし、多数の受講学生を小スペースのグラウンドでさばくにはサッカーや野球などしか開講できなかつた。学生自身も被災者で黙々と行動していた。



神戸大学六甲台グラウンドは3月初旬まで自衛隊の駐屯地として使われ、その後は東邦ガスの復旧応援基地となった。

撮影者名:進藤裕之

撮影日付:1995.1.27

提供:神戸大学附属図書館震災文庫

私はちょうど医療短大閉校の最後の年でもあり、現在の学部とかけもちであった。須磨区の名谷学舎へ行けたのは1か月くらい経ってからだった。乗り継ぎ、歩き、乗車待ちの長蛇の列。普段なら2時間の行程が片道6時間かかった。三宮界限は道路に民家の屋根が崩れて道路にせり出し、人々は車道にはみ出て歩行。道路は波打って、速度は出せない。バイクの転倒はなんども見た。自損事故で亡くなった人もいた。ガス漏れの匂いの中黙々と歩いた。

東京の某大学の友人から電話があり、「看護学科の学生が手伝いに行きたい。ついては長田区の〇〇養護施設へ行くことになったが交通状態はどうなっているのか」ということであった。結局その友人と二人で事前調査で長田区に入った。新聞紙上にもたびたび出ていた空襲後のような商店街の光景には言葉もなかった。また、長田駅着直前の車窓から見えた光景も忘れられない。その光景は、スピードが出せない満員の電車内は車窓に広がる光景を見ながら、みんな無言である。ふと線路沿いの小さな公園のベンチに座る女性を見た。うなだれ両手で顔だったか頭だったか、覆っていた。家人を亡くしたのか。可愛い子どもを亡くしたのか、定かではないが異常にさみしい光景が記憶に残っている。

私のゼミの男子学生は、下宿近くで下敷きになった方を救助しようとするも助けられず、火の手がせまり、その方から「もういいから行きなさい。どうぞしっかりいきてください」との声を後に残してきたそうです。彼は某大手の放送会社に入社するも、34歳で退社し、今は琉球大学医学部に編入学を果たす。あと2年の在学です。その方の遺言を守るとのことです。